

ずっとこけ虞美人

今日 あした

項羽は、秦の始皇帝の最後の巡行を見た日のことを思い出している。警護の厳しい天子の行列であったが、

「遠い所からだったら拜んでもよろしい」というふれが出ていた。

二十一、二の項羽は、秦に敗れ亡命中の叔父の項梁こうりょうと共に、この行列を見ていた。項氏は代々楚の將軍で、項梁こうりょうの父は秦の將軍王翦おうせんに殺されたのだった。

目の前を行く、黒と白の色に統一された美しい始皇帝の行列は、どこまでも続いている。

「のう、項羽よ、楚の將軍の家に生まれながら、国破れてこの光景を見るのは悔しいのう」と言った項梁の言葉に項羽は感極まって、

「あやつに、とってかわってやる！」と行列を睨み据えた。

項羽の兵法の師でもある項梁は、周りを見回して、血の気の多い項羽に

「大きな声でそのような……とたしなめながらも、

「秦の始皇帝を『あやつ』と言い切るとは、末恐ろしくも頼もしくもあるぞ」と、喜んだ。

秦の始皇帝が亡くなったのは、この巡幸の途中だった。天下を統一した秦ではあったが、後が続かない。次の天子を廻めぐって世は乱れた。

その混沌から秦を抹殺し、天下を平定するために、楚は王の末裔の懷王かっを担かぎ、復讐の旗頭とした。そして同じ志を持つ、項羽や劉邦の軍を一斉に秦の都咸陽かんようを目指させた。

「函谷関を越え、先に関中かんちゆうに入って平定した者を王にする」

懷王は、高らかに檄を飛ばした。

項羽は未だ二十六歳の若者。関中に向かう敵をバツタバツタと薙倒し、鬼神のごとく打ち進み、降伏をした兵隊すら残忍に生き埋めに……、その数ざつと二十万人。殺戮を繰り返しながら意気揚々と函谷関にたどり着いた。

だが、秦の都、咸陽に一番乗りをしたのは劉邦だった。

そう、四十万の兵を引き連れて函谷関に凱旋したはずの項羽の前に、すでに劉邦軍はいたのだ。たった十万の兵で。

劉邦は、柄の悪い、四十過ぎの狸親父。

途中、落とせない邑があると、のらりくらり、戦わずして遠回りをしながら、来るものは拒まず味方に引き入れ、項羽の軍とは反対側から関中に到着した。

秦の始皇帝の息子の子嬰が、咸陽で勝ち名乗りを上げた劉邦に、秦の王と名乗って降伏を願い出て、劉邦の前にひれ伏し皇帝のしるしである珍宝を献上した。これにて一件落着。劉邦は子嬰を受け入れ無血開城。その上、略奪も強姦もせずに民心を味方につけ、関中に居座った。

関中の民心は、戦った相手をことごとく殺してしまう鬼神の如き項羽が関中に入ろうとしていると聞いて、恐ろしい項羽ではなく、穏やかな劉邦に圧倒的に傾いていた。劉邦の軍は寝返ったものをみんな引き入れているので、圧倒的に人数も多い。

劉邦はしたたかである。

「関中をはじめに平定した者を王にする」という、楚の懷王にいち早く、秦の皇帝のしるしの珍宝をすでに持っていることを報告して約束通り王として国を治めることとした。

そしてこの年を高祖元年とし、漢の時代の始まりとした。

項羽は力で勝る自分の負けを認めることが出来ない。だが、約束は約束である。楚の懷王は約束通り劉邦を認めてしまったのだから……。

今は、漢の三年。項羽は垓下がいかにあつて、四方を漢軍に包囲されている。

あれから三年、項羽は、漢の支配下にいることに我慢がならず、ずっと劉邦に戦いを挑み続けている。項羽はめつぼう強いので、目の敵はやつつけるのだが、捕虜にした兵を皆殺しにしてしまうので兵隊は増えない。

一方の劉邦の率いる軍は捕虜にした敵の兵隊をみな寝返らせて、自分の軍隊に入れてしまう。不利になって援軍を頼むにも駆け引きが上手い。劉邦にしてみれば圧倒的に有利な垓下の戦いだった。

歴史を先取りしてひとこと。

今夜は項羽が今生で過ごす最後の夜であります。

戦況は項羽にとって最悪である。周りを劉邦の軍に囲まれ、食料は底をつき、味方の兵は次々に逃げ出している。

項羽は、いつでも、戦に行くときでさえ、愛人の虞ぐを傍らに置いている。

「虞よ、俺は天に見放された。今度の戦は負けると思う」

「どうしたの、そんな気弱な……：負けたことなど一度もないじゃない、どうかしているわ」

「俺だって、こんな気持ちになったことはないぜ。だけど、胸騒ぎがするのだ。

楚の山や川が目の前に甦るのだ。幼い頃のことや次々に思い出されて、いまここにいるのが不思議なのだ」

「ねえあなた、ほら、楚の子守歌が聞こえるけど騙されてはだめよ」

「虞よ、お前は懐かしくはないのか」

「周りの敵兵が歌っているのよ。漢軍はしたたかですもの、楚の降参した兵隊も捕虜も全部寝返らせて自分の兵隊にしまったのよ。そして、こんな夜更けまで歌わせているのよ。妾は騙されないわ」

「虞よ、この歌を聞いてみる。漢はわが楚を全部手に入れたのじゃないか。四方八方から聞こえるじゃないか」

「こんな歌に惑わされないで。あなたは強いわ。」

函谷関を目指していた時、敵をことごとく倒して邑々を焼き払って先に進むあなたは光り輝いていた。妾は共に輿に乗っていて、あなたの内からみなぎる炎がかげろうのように立ち昇っているのを見たわ。あなたが抱いていてくれなかったら、あなたの火の玉のような迫力に妾は燃え尽きてしまったわ。項羽さま、あなたは今も輝いているわ」

「そうさ、俺は今だって胸の内に火の玉をもっている。向かっていけば誰一人逃げないものはいない。だが、天は俺を滅ぼそうとしている。俺は弱くない。天が見放したのだ」。

「あなたは死んでしまうの」

「もうよい。虞よ、酒をつけ、みなも飲もう。お前のために歌おう。俺のために走ってくれた愛馬、驩のために歌おう。」

力 山を抜き 気は世を蓋う

時 利あらず 驩逝かず

驩逝かざるを 奈何すべき

虞や虞や 若を奈何せん

項羽は繰り返して詠い、虞も唱和した。

そののち、驩にまたがり、夜陰に乗じて最後までいた兵八百余名と共に漢軍

の包囲網を突破。だが夜明けに漢軍に追いつかれた。

項羽は最後まで火の玉と化して戦い、天の意思で死ぬのだと、自ら首を切つて果てた。

「楚歌の声 四方に響き

我知らず 昔を偲ぶ

君 逝きたれば

虞 死して花となる」

虞は、項羽を見送ると歌を残して自ら命を絶った。

歌の通り、その場所に美しい花が咲いた。

その名を人は 虞美人草 とよんだ。

完